



坊さんはなぜ剃髪するの

現代の日本で、職業で髪型が定められているのは大相撲の力士と坊さんぐらいでしょう。私はお寺に生まれ育ちましたが、高校を卒業して京都の本山へ入山するまで丸坊主にしたことは一度もありませんでした。本山へ修行に行くことには不安がありましたが、丸坊主にすることは特に心配でした。丸坊主になった自分の顔が想像できず何日もの間、鏡を見ることはできないであろうと思いました。18歳の4月8日、本山の門をくぐったその夜、ついにその時はやってきました。ずっと年上の先輩僧侶が廊下で年季のいったバリカンで問答無用であつという間に刈あげました。同じ日に入門した九州から来た K 君が私の次に丸刈りにされていましたが、半分刈ったところで弱弱しく聞こえていたバリカンの音がパタッと止まりました。先輩僧侶が「明日、電気屋さんに修理してもらってからそれまで辛抱しとけ！」と言い、いとも簡単に人生初の剃髪の儀式が中断されました。私は不安などすっかり忘れ、「ああ～2番目でなくて良かった」という安堵感とモヒカン刈りになった K 君の困った顔が可笑しくてたまりませんでした。1年後、その先輩が本山を去る時、あの時バリカンが故障したのは嘘で、門をくぐってから私がいかに不安そうで夜逃げをするのではないかと心配になり、K 君が犠牲になったことを知りました。合掌



初めて剃髪して40年の月日が過ぎ、今では毎朝風呂場で剃髪しています。10分もかかりません。その時鏡は一切見ません。鏡を頼ると肌

を傷つけるもとになります。頭皮と剃刀がすれる音の変化だけをたよりに剃ります。先日、春彼岸の法要に京都へ行く際、駅のトイレで用を足し、手を洗っている時に今朝剃り上げたばかりの自分の頭を鏡で見ました。その出来栄のすばらしさに「今日もピカピカやなあ！」と思わず声が出てしまいました。すると左斜め後ろから熱い視線を感じました。恐る恐る確認すると、禿げたサラリーマン風のオジサンが用をたしながらこちらを睨んでおられます。てっきり自分がからかわれたのだと思われたのでしよう。私のようなピカピカ頭に言われては文句など到底言うことはできません。磯野波平氏のように残り少ない髪を慈しみ「威厳」をもって堂々と生きて行ってほしいものです。



随分前に産婦人科の先生の話を知りました。「最近、帝王切開をすると羊水からシャンプーやリンスの匂いがする」という恐ろしいものでした。また修験者の方からは「滝に打たれる芸能人などの動画はでたらめで、昔の偉い修験者は髪に水が触れないよう肩で滝を受け止める」と聞きました。髪が水に触れると「気」を抜かれるそうです。「朝シャン」は学校で集中力を失い成績が悪くなるそうです。そんな神秘的な「髪」を扱う平安時代の宮中で公家たちの髪を扱いお仕えした髪結師はとても高い「位」だったそうで、そこに出入りする僧侶には到底得られないであろう高さだったそうです。それで坊さんは剃髪をするようになったそうです。真実かどうかは不明です。ただ、年配のご婦人が美容室の店主を「先生」と呼ぶのもその名残らしいです。

俊徳丸